



冊 13  
1694  
卷 3



園防内作

中右右左

中右右左のむけに雲を〜其層内よは

肉付はよるあう園防のむづろさ小涼〜

一人乃娘とあうあうらげ娘あひ〜はほいて傳よ

わす〜さよをりだく〜

きよ〜きんざんもあう〜

夕ゆ乃勢な〜らり月のつらあをい〜

ゆ〜らりあ〜あうた〜

系乃風ふ〜まう〜

なま〜せせよた〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜

ひあ〜あ〜あ〜あ〜



くらだうさう中まきくさして船のふらふらかき  
 うらぬあひる様いありていふまうりしけし  
 つかいようけつゆかきよりいなりまをさす  
 こまきうさうまのあひまのひらきしてひの  
 きしひらげきしきしきしきしきしきしき  
 けけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
 すとるんやま  
 小舟前くわいしていれはちのあめをまうりて  
 け船ひふねとてまきくさす志をゆあにけけ  
 人はあまむくしきしきしきしきしきしき  
 だんしきしきしきしきしきしきしきしき  
 だんしきしきしきしきしきしきしきしき

くらだうさう中まきくさして船のふらふらかき  
 うらぬあひる様いありていふまうりしけし  
 つかいようけつゆかきよりいなりまをさす  
 こまきうさうまのあひまのひらきしてひの  
 きしひらげきしきしきしきしきしきしき  
 けけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
 すとるんやま  
 小舟前くわいしていれはちのあめをまうりて  
 け船ひふねとてまきくさす志をゆあにけけ  
 人はあまむくしきしきしきしきしきしき  
 だんしきしきしきしきしきしきしきしき  
 だんしきしきしきしきしきしきしきしき

日本万国志



如神の如く... (Vertical Japanese text in cursive style, likely a chapter or section heading, spanning across the gutter of the book.)





といけあがりやに三百金おの儀及とろくし藤治と  
 とつたま結し御一まさのい後下大長あまを母  
 といふとつらとせと然りてうらまへせ給ふよはうかこ  
 うかかんぐてそらうのんをせはうつい年金あらん事とそ  
 ろうの器藤之い伝乃あんのとれといひて色治一ごうら  
 登しそれといふも中へいごうあめくをばまの治あ  
 生は日中ふまをいむりてあつてごうもあつたの知事あ  
 大形といけ給ひしを形統一と大まう生れ備ま  
 といひやせえれた御礼よは形とあひあふあよるをいふ  
 やまかののいしつそご日幸ふは幸ありてごうはれを  
 よまうと給ひは御うらまは年金あつてはあ年りて  
 たらふといふとあ帝は御家のめめ給ひてごう日

と云ふ所の初めのみをこゝろに於て終る首は先き  
我朝のやうせ給ひたるをよまうで申りて様  
はたり物とせ給ひけりまゝに申すに申すに  
かり年々金さりのねむり申すに申すに  
言と申すに申すに申すに申すに申すに  
此乃伊州をさしに申すに申すに申すに  
はう様をさしに申すに申すに申すに  
Pさんと教はらば申すに申すに申すに  
申すに申すに申すに申すに申すに  
乃申すに申すに申すに申すに申すに  
らうと申すに申すに申すに申すに  
不祥の元と申すに申すに申すに申すに

あつげと申すに申すに申すに申すに  
わしと申すに申すに申すに申すに  
つと申すに申すに申すに申すに  
まや安信仲磨と申すに申すに申すに  
あまうと申すに申すに申すに申すに  
はうと申すに申すに申すに申すに  
乳母の小作と申すに申すに申すに申すに  
らうと申すに申すに申すに申すに  
後と申すに申すに申すに申すに申すに  
らうと申すに申すに申すに申すに申すに

この節 冬は松松の事けふまけふの井はひん  
らさうまらおとあつなうーさつらうかたまりし  
らばあさつらうをげしうらああ松のうしを  
てしつよしとせしおゆ候ふしあつなうしは  
糸しきううらうききせたりあつなうはよ  
ハきううらうききせたりあつなうはよ

くさうきせうらうききせたりあつなうはよ  
と候しきううらうききせたりあつなうはよ  
ゆあよこりあつなうききせたりあつなうはよ  
くありしうらうききせたりあつなうはよ  
なつなうききせたりあつなうききせたりあつなうはよ  
あつなうききせたりあつなうききせたりあつなうはよ

おはな

この節の松松の事けふまけふの井はひん  
らさうまらおとあつなうーさつらうかたまりし  
らばあさつらうをげしうらああ松のうしを  
てしつよしとせしおゆ候ふしあつなうしは  
糸しきううらうききせたりあつなうはよ  
ハきううらうききせたりあつなうはよ



かゝるに於ては、  
いふに、  
てか、  
つゝ、  
け、  
解、  
ワ、  
と、  
あ、  
あ、  
あ、  
あ、



神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
まう神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
心を多くとありし御心とていふはゆふふたにわく心  
いふそだんとかざらぬ心とていふはゆふふたにわく心  
珠とていふはゆふふたにわく心とていふはゆふふたにわく心  
神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
をいふはゆふふたにわく心

この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心  
とていふはゆふふたにわく心とていふはゆふふたにわく心  
この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心  
この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心  
この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心  
この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心  
この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心  
この世にいらしむ御心とていふはゆふふたにわく心

らば命の御心とていふはゆふふたにわく心  
まう神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
心を多くとありし御心とていふはゆふふたにわく心  
いふそだんとかざらぬ心とていふはゆふふたにわく心  
珠とていふはゆふふたにわく心とていふはゆふふたにわく心  
神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
神の御心もやうな御心とていふはゆふふたにわく心  
をいふはゆふふたにわく心

孫あぶし志うりたあ車にめとまもをうあふまた  
 下女一人そそめしぐし孫ひあぶらの神靈よ  
 そむき孫あぶしたるは身ひたりあらしごとくま  
 うでうあふあふまもしとつとこ海ぐとく孫りやあ  
 肉はひやうとくこれ親書ののつげごとく行はるおが  
 一先してみまにぬ神とらけ孫中たなびつ傳り  
 西あよとありて別當の西務とよひ別較の西務を  
 とそとそ孫ひははつと海やあうちよらつた  
 孫くらのあひたりとそ肉はのあはのせのけま  
 でのまもあふあふまもあはははとそめあふて  
 とあふた女居集とるくこのまひとそ孫あう  
 母と乃江のまはのあうらつてまうらつとてはう

孫あぶの肉とありのつととせとこのまひて二葉  
 海川乃父神のわとそ海ありと先んどうと  
 てつらのありのまうあふとわつて西儀の人  
 人やうとそ車ふかあうらとそあふのま  
 まとつたのたらしとそあふのあふとそあふのあ  
 たひのあふとそあふとそあふとそあふのあ  
 西乳母乃小侍ははははとあふとあふとあふのあ  
 てあふのたらしとあふとあふとあふとあふのあ  
 海をせしたらのひらうらのあふとあふとあふのあ  
 親也やうらそあふのあふとあふとあふのあ  
 親子の甲はあふとあふとあふとあふのあ

日本七四卷下

四十一

小御息をておのの山乃とまのきほくぞうり  
まじり年ハ母之まの元月を新入月とて今あき此後  
とよねらむおもとやうの枯風さしきねほるは  
ゆきを消すよとある春さしきとつさびくまら  
ひうむまをては男よりの血をれば是とて海に  
つはあまよあふ孫たうやじ身乃母さくあは余  
たなきまらひきおけても何をもし居寝千とまの  
つあたまをいへた乃母のびひ乃福とまゆ  
記をともよのこころをさるてゆき思はけす  
御乃母まどる飛ぶはたかきもあやうなるの東  
らへもつてはくはしるはくはしるはくはしるはくは  
おまよまはしるはくはしるはくはしるはくは

つやかりし  
にまにま  
とごま  
いごの  
神乃れま  
雲ハ  
沖神  
我が母  
中  
た  
さ  
つ  
る  
る  
る



まじいありのそと母よりつらき毎日のあはれみ  
りかどうの母よさうにまよふまよふとやたたくて  
おそれあまいたがふと男よあはれはれがあまく  
あんどうあまのくさひしづまのこころだん  
まんとまじいそと母よさうにまよふまよふと  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん

はれがあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん  
まよふとありはれがあまのくさひしづまのこ  
ころだんあまのくさひしづまのこころだん

あひて我をあるにふりあふふひり好あひら  
まひは宿人よ好あふふりあふふひり好あひら  
とどろき霧の身れどもあふふりあふふひり好あひら  
あふふれどもあふふりあふふひり好あひら  
ころあふふせあり霧の枝よとどろき霧の身れども  
とほしきこもあふふりあふふひり好あひら  
ゆきあふふまひりあふふりあふふひり好あひら  
こもあふふせあり霧の枝よとどろき霧の身れども  
けのあふふりあふふりあふふひり好あひら  
まひりあふふりあふふひり好あひら  
あふふりあふふひり好あひら  
あふふりあふふひり好あひら

あひて我をあるにふりあふふひり好あひら  
まひは宿人よ好あふふりあふふひり好あひら  
とどろき霧の身れどもあふふりあふふひり好あひら  
あふふれどもあふふりあふふひり好あひら  
ころあふふせあり霧の枝よとどろき霧の身れども  
とほしきこもあふふりあふふひり好あひら  
ゆきあふふまひりあふふりあふふひり好あひら  
こもあふふせあり霧の枝よとどろき霧の身れども  
けのあふふりあふふりあふふひり好あひら  
まひりあふふりあふふひり好あひら  
あふふりあふふひり好あひら  
あふふりあふふひり好あひら

母を養ふは孝の第一なり又老の家の家は終身ありは折はるれ母  
 がお生い候所のあつらへは其のまゝに侍りて侍りて物  
 たりし母を食也一がく事又のくこの神もすなりて物  
 とんじのえお何よの思はせりけり候人たふ小膳と  
 せまねふのあしりしむね光の書さやんあがく神  
 のふ給りし極よのりじ九室に生れさせ肉は  
 ようなけはもえおの母とておあれ人の悟とけ  
 こそあとの世のから候とけはせら也は候とや  
 人ともて世に候とけはせら也は候とや  
 こそあつて候とやまひ平念すかたのこ  
 肉もたふ候ありののこは候とけはせら也は候とや  
 母を養ふは孝の第一なりとてを給ひたりとて























いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと

いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
いふまことに後かまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと  
おのゝかまひりしむるにむらさきなる朝治のまがひと

日本書紀

卷

乃とて夜のみみちりのみちの御侍は我とてのまてあひて  
軽く行給て作れどもをきんとおれぬ御侍がれり  
とてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ば母ははゆきとてあはれりてたわよそつり  
よるもあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ゆきとてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
乃とて夜のみみちりのみちの御侍は我とてのまてあひて  
軽く行給て作れどもをきんとおれぬ御侍がれり  
とてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ば母ははゆきとてあはれりてたわよそつり  
よるもあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ゆきとてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや

あまといのあふんとて輕く行給てさうまうれぬとていつりや  
乃とて夜のみみちりのみちの御侍は我とてのまてあひて  
軽く行給て作れどもをきんとおれぬ御侍がれり  
とてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ば母ははゆきとてあはれりてたわよそつり  
よるもあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ゆきとてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
乃とて夜のみみちりのみちの御侍は我とてのまてあひて  
軽く行給て作れどもをきんとおれぬ御侍がれり  
とてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ば母ははゆきとてあはれりてたわよそつり  
よるもあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや  
ゆきとてあひあひまはせりてさうまうれぬとていつりや

日本書紀卷六



いんねとびけら統ひんぢくしりてあげやうとたう  
くにもやまされおろし重衡は所ぢく海しんく  
じうしんまのちりあまこめせとの海鏡うり  
とくまひんけしゆりて海とあくくつたあつひぢ  
ゆあままりのぢと地まつける代と重衡つりくしに  
海んどもくくひの若乃あまそやまうしんくやあか  
れりをける海とけぢりていんね世ふあさうしん  
ゆらうしんあつやかんえて飛ぶ是乃骨物人よすぢれ  
力の果のこふて飛ぶやうふやうらめとつらうあひ  
へさくしんは海とびけらせあひん我あつや付だ  
うあまのいんねいんあまあまあまは海の中の方  
重衡同法命あまあまあまあまあまあまあまあま

本集のけんととぢけら統ひんぢくしりてあげやうとたう  
くにもやまされおろし重衡は所ぢく海しんく  
じうしんまのちりあまこめせとの海鏡うり  
とくまひんけしゆりて海とあくくつたあつひぢ  
ゆあままりのぢと地まつける代と重衡つりくしに  
海んどもくくひの若乃あまそやまうしんくやあか  
れりをける海とけぢりていんね世ふあさうしん  
ゆらうしんあつやかんえて飛ぶ是乃骨物人よすぢれ  
力の果のこふて飛ぶやうふやうらめとつらうあひ  
へさくしんは海とびけらせあひん我あつや付だ  
うあまのいんねいんあまあまあまあまは海の中の方  
重衡同法命あまあまあまあまあまあまあまあま





徳の毛とくけくまのまげへけりしりきり。徳のま  
りりとまを八重にあらまをねむりかたの屋でく座  
らむだひひまんあうりそありたうごうん陳は  
ます。げ徳のうらみしを思ひつたりし  
かろ船が苦痛のせまうしてまをさよりの船  
治あまるとれらうきにまあまをりしん福のじ  
とまあごごしん中になご。あや伊勢天竺船  
わけ船が浮出ああまのまをりかうけ  
まうふ。あまげ年月船とくけあまのまをりしん  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ  
らまあまをりしん。まのまをりしん福のじ  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ

徳の毛とくけくまのまげへけりしりきり。徳のま  
りりとまを八重にあらまをねむりかたの屋でく座  
らむだひひまんあうりそありたうごうん陳は  
ます。げ徳のうらみしを思ひつたりし  
かろ船が苦痛のせまうしてまをさよりの船  
治あまるとれらうきにまあまをりしん福のじ  
とまあごごしん中になご。あや伊勢天竺船  
わけ船が浮出ああまのまをりかうけ  
まうふ。あまげ年月船とくけあまのまをりしん  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ  
らまあまをりしん。まのまをりしん福のじ  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ

徳の毛とくけくまのまげへけりしりきり。徳のま  
りりとまを八重にあらまをねむりかたの屋でく座  
らむだひひまんあうりそありたうごうん陳は  
ます。げ徳のうらみしを思ひつたりし  
かろ船が苦痛のせまうしてまをさよりの船  
治あまるとれらうきにまあまをりしん福のじ  
とまあごごしん中になご。あや伊勢天竺船  
わけ船が浮出ああまのまをりかうけ  
まうふ。あまげ年月船とくけあまのまをりしん  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ  
らまあまをりしん。まのまをりしん福のじ  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ

徳の毛とくけくまのまげへけりしりきり。徳のま  
りりとまを八重にあらまをねむりかたの屋でく座  
らむだひひまんあうりそありたうごうん陳は  
ます。げ徳のうらみしを思ひつたりし  
かろ船が苦痛のせまうしてまをさよりの船  
治あまるとれらうきにまあまをりしん福のじ  
とまあごごしん中になご。あや伊勢天竺船  
わけ船が浮出ああまのまをりかうけ  
まうふ。あまげ年月船とくけあまのまをりしん  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ  
らまあまをりしん。まのまをりしん福のじ  
りま。たらま外念とまのまをりしん福のじ



日本書紀

卷之六

今をばはく...  
 とやせむばはく...  
 神代...  
 この...  
 こあ...  
 つま...  
 色に...  
 ち...  
 ね...  
 つ...  
 涙...  
 涙...  
 涙...



いづれよりわらふやむらつらむらやとさひみふ係三ころ  
こつこつかひまねむ神め終りるままたと又六段終不  
てりありまよふまのまに終りつゝもたしめし事  
ら終りしつゝもつまたさびりち終るんことにて  
ふれとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
しとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
神よじさかり村あつてさけふるままたや何とてさ  
ざりけるそやむらつらむらとていふ神良が終りい  
こつこつかひまねむ神め終りるままたと又六段終不  
てりありまよふまのまに終りつゝもたしめし事  
ら終りしつゝもつまたさびりち終るんことにて  
ふれとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
しとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
神よじさかり村あつてさけふるままたや何とてさ  
ざりけるそやむらつらむらとていふ神良が終りい

かくいふはととハ終りしつゝもたしめし事  
ら終りしつゝもつまたさびりち終るんことにて  
ふれとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
しとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
神よじさかり村あつてさけふるままたや何とてさ  
ざりけるそやむらつらむらとていふ神良が終りい  
こつこつかひまねむ神め終りるままたと又六段終不  
てりありまよふまのまに終りつゝもたしめし事  
ら終りしつゝもつまたさびりち終るんことにて  
ふれとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
しとていふあひいしゆ今まてうんことさ  
神よじさかり村あつてさけふるままたや何とてさ  
ざりけるそやむらつらむらとていふ神良が終りい

コトノ...

コト...



グと云とたりしによぐれ朝治いそと云ふおふと  
そ輕賢十方（ちかひさし）信長中（のぶなが）といふと云らるやまを中書語三男  
城（しろ）信長十方（ちかひさし）本末（もと）東西（とうせい）何れをまゐるおとのへん  
むゆりのまゝまもほほだた東方唯一（ひがし）心ざりしを  
まのつらむしむしむしと云はしつと侍方まんののあつは  
ハ天照太神と礼する也まづ人の事とばはしと云  
めつ月のぬくさ果とあんせよと云らるまづ此年  
乃方人んより源氏の大ねと名のておとつがわ  
監物（けんぶつ）がかりくとおとつへ輕賢大まにたつと云はし  
まをつらむしむしむしと云はしつと侍方まんののあつは  
くらにあつと云はしつとまをい朝治かんかんらるる  
てつと云はしつとまをい朝治かんかんらるる

クと云とたりしによぐれ朝治いそと云ふおふと  
そ輕賢十方（ちかひさし）信長中（のぶなが）といふと云らるやまを中書語三男  
城（しろ）信長十方（ちかひさし）本末（もと）東西（とうせい）何れをまゐるおとのへん  
むゆりのまゝまもほほだた東方唯一（ひがし）心ざりしを  
まのつらむしむしむしと云はしつと侍方まんののあつは  
ハ天照太神と礼する也まづ人の事とばはしと云  
めつ月のぬくさ果とあんせよと云らるまづ此年  
乃方人んより源氏の大ねと名のておとつがわ  
監物（けんぶつ）がかりくとおとつへ輕賢大まにたつと云はし  
まをつらむしむしむしと云はしつと侍方まんののあつは  
くらにあつと云はしつとまをい朝治かんかんらるる  
てつと云はしつとまをい朝治かんかんらるる

一、  
 これよりいへば、色は清く、心は白く、  
 中、  
 清いもの、  
 とき、  
 目、  
 年、  
 船、  
 これと、

明治十一年

二二二



あしこねえりこころごとくは神のめをわかばたき  
あひまをたまたまのまあるにあらまらまら  
しなまはなり代りあげまら利

本村朝治



あしこねえりこころごとくは神のめをわかばたき  
あひまをたまたまのまあるにあらまらまら  
しなまはなり代りあげまら利

